

場所の自己限定としての意識作用

我々が意識現象とか意識作用とかいふものを考へる時、如何にしてさういふものが考へられるであらうか。無論、考へるといふことが既に一種の意識作用である、かゝる問題の提出そのものが自家撞着に過ぎないとも云ひ得るであらう。併しかゝる議論に入ることは姑く置き、とにかくその然らざるものと區別して意識作用といふものが考へられる以上、それは我々の思惟といふものと何等かの關係を有し、それが如何なるものであり、如何なる意味に於て思惟せられ得るかが明にせられなければならぬ。

我々が何物かを意識するといふことは一つの過程と考へられる、即ち意識作用といふものが考へられる所以である。私はそれを否定するものではない。併し過程とは如何なることを意味するか。過程といふものが考へられるには、或一點に於てあるものが或方向を有しその前後に無限の連絡を有するものが考へられなければならぬ、過程は時間的と考へられる所以である。併し時といふものも色々な意味に考へられるから、今それを直に時間的といふを要せない。或一點に於てあるものが或方向を有

6-087

つといふには、さういふ方向を定めるものがなければならぬ、即ち過程そのものを定めるものがなければならぬ。方向がなければ云ふまでもなく、方向に無關係と云つても過程といふものは成立せない。或一點に於てあるものが方向を有つと云ふには、方向を定めるものがなければならぬ。かゝる方向を定めるものが或一點に於てあるものそのものにあると考へることもできれば、又その外にあると考へることもできる。併し方向を定めるものが、或一點に於てあるもの即ち數學者の所謂要素そのものにあると考へる時、前後兩方向は結び附くと考へられねばならぬ。要素自身が方向を有つといふ時、その前後に無限の系列が考へられるであらう、併しその兩尖端は結び附くと考へられなければならぬ、即ちそれは或定つた一般者の自己限定として考へられるものでなければならぬ(かゝる一般者が具體的一般者と云はれるものである)。而して斯く考へられる時、それは過程といふことの眞の意義を失ふといふことができる。眞の過程と考へられるものは外から内を定めるといふ意味を有ったものでなければならぬ。外から内を定めるといふことによって眞の過程と考へられるものが成立すると考へるならば、過程といふものは外を内となすものによって成立すると云はねばならぬ、外と考へられるものを包むものに於て成立すると云はねばならぬ。それを單に外と云つてしまへばそれによって過程といふものは成立せない、單に内と云つてしまへば又それに於て過程といふものは考へられない。それに於ては、外と考へられるものが内であり、内と考へられるものが外と考へられるものでなければ

ならぬ。かゝる矛盾の統一に於て眞の過程といふものが考へられるのである。

私が今、内と云ったのは思惟の内といふことを意味するのである。判斷的一般者の自己限定によって判斷的知識が成立するとすれば、かゝる限定の極限に於て個物に達すると考へることができる。個物に於て我々は既に直覺的なものに到達するのである、そこには既に非合理的なるものの合理化の意義がなければならぬ、外を内となす意義がなければならない。併し個物は尚過程ではない、眞の過程といふものが考へられるには、個物を越えた意味に於て外を内となすものが考へられなければならない、個物を限定する一般者を越えた一般者といふものがなければならない。眞の過程はかゝる一般者の自己限定として考へられるのである、是に於てヒポケーメノンとして考へられた個物は働くものとなり、更に働きそのものといふ如きものとなって行かねばならぬ。かゝる考を進めて無にして自己自身を限定する純なる作用といふ如きものにも到ることができるであらう。併しそれは何處まで行っても、考へられたもので考へるものではない、意識せられたもので意識するものではない。作用といふものが考へられる時、縦それが純なる作用と考へられるものであっても、そこに一種の極限といふ如きものが考へられなければならぬ、その意味に於て唯無限に外から定められるといふ單なる過程といふものと區別することができる。一種の極限として純なる作用といふものが考へられる時、それは既に判斷的一般者の自己限定として考へられたものでなければならぬ、前に云った如く前後兩方向の

尖端が結合して居ると云ふことができる、一般者の自己限定として極限といふへのが考へられるのである。無論、極限といふものが考へられるには外からの限定に撞着したといふことがなければならぬ、併しそれは内から撞着したのである、極限と考へられるものは尚判斷的一般者の場所に於てあるものである、純なる作用といふ如きものに至っては無の場所に於てあると云ひ得るであらう。併しそれは相對的無の場所に於てあるものであつて、眞の無の場所に於てあるものではない。フィヒテは自覺の事實から事行といふものを考へた、併しそれは自覺せられた自覺であつて自覺する自覺ではない、故に事行から自己自身を愛する眞の自覺は出て來ないのである。

私はいつも云ふ如く自覺といふのは自己に於て自己を見ると考へられ、而も自己が見られない所に即ち自己が無となった所に眞の自己を見ると考へられるのである。對象的に見られるかぎり、それは自己でない、極限として見られると云つても、それは既に眞の自己ではない。自己に於て自己を見るといふのは何處までも對象的なものを包むといふことを意味するのである、場所が無となつて行くといふことを意味するのである。極限といふものが見られるかぎりそれが純なる作用といふ如きものであつても、既にその場所が限定せられると云ふことができる、何處までも包むと云はれない、場所が眞の無となるとは云はれない。而も一般者が自己に於て自己を限定するといふことは極限點に於て止まらねばならない、既に超越的なものに撞着したと考へられる上に、更に超越的なものを對象

的方向に定める一般者を考へることは不可能でなければならない。かゝる方向に於ては唯單なる無限の過程といふ如きものを考へるの外ないであらう。然るに自覺に於て自己が見られなくなる所に自己を見るといふ場合、そこに無にして有を限定するといふ意味がなければならない、無限なる一般者の自己限定に對して逆に之を限定する意味がなければならない。かゝる意味に於て一般者を包む一般者といふものが考へられるのである、有に對する無ではなく、無にして有を限定する眞の無の場所に於て自覺的なものが限定せられるのである。故に自覺的なものは何處までも自己自身に於て矛盾するものでなければならない。自覺に於て何處までも自己の中に自己を見る、何處までも對象的なものを包むといふ意味は、單に一般者が何處までも廣がり行くといふ意味ではなくして、逆にかゝる一般者を限定するといふことでなければならぬ。斯くして眞にかゝる一般者を包むと云ひ得るのである、單に相對的に之を包むといふ意味に於ては眞に之を包むとは云はれない。故に一般者を包む一般者即ち自覺的一般者の自己限定といふのは場所が場所自身を限定するといふ意味を有たねばならない、之によって限定せられたものそのものが場所といふ意味を有ったものでなければならない。我々の自己と考へるものは皆かゝる意味を有ったものである、故に自己は各その對象界を有つ、對象界と考へられるものは自己自身を限定する一つの一般者といふべきものである(而して自己がその場所となるのである)。一般者を包む一般者即ち自覺的一般者から見れば、對象的に自己自身を限定する判斷的一

般者の自己限定と考へられるものは自覺の過程たるに過ぎない。否定の否定たる自覺に於ては否定の契機が含まれねばならない、前に對象的限定に對して自覺的限定を逆限定と云ったが、自覺的限定から又逆に對象的限定を逆限定と見ることができる。併し自覺的限定といふのは對象的限定に相互的に對立するのではなく、無限なる對象的限定を自己否定として内に含むといふ意味を有って居なければならない、否單に含むといふのではなく、かゝる自己否定を自己肯定とする意義を有って居なければならない。故に眞の自覺に於てあるものは、ノエマ的方向とノエシス的方向とへ無限の限定を有つと考へられる、而もノエシスがノエマを包むと考へられねばならない、然らざれば自覺的とは考へられない。、而して斯く考へられることは、それが否定を肯定とする自己矛盾的存在として、無にして有を限定するものと云はざるを得ない。

我々の意識を志向的と考へ、自己が自己の中に無限に自己を志向すると考へれば、その極限に於て自覺に達すると考へられるでもあらう。併しかゝる考へ方は具體的一般者の自己限定と同様の考へ方であつて、かゝる考へ方から自覺に到ることはできない、恐らく知的自覺といふ如きものにも到ることはできないと思ふ。かゝる考へ方によって自覺に至ると考へるには、一般者の場所といふものが既に限定せられたものでなければならない。而して一般者の場所が既に限定せられて居ると考へる時、かゝる一般考の自己限定としては純なる作用といふ如きものまでも考へることができるであらう、併

し自己自身を意識するものに達することはできない。極限点といふものが考へられるには、私は一般者が自己限定の極限に達し、そこに何等か超越的なものに撞着する意味がなければならぬと思ふ、外から自己を包むものに撞着したといふ意味がなければならぬと思ふ、私の所謂場所の自己限定に到達したといふ意味がなければならない。カントルの極限の考はかゝる點に於て缺けて居たのではなからうか(數學的存在を證明することはできない)。眞に極限点といふものが考へられるにはデデキントの如く直覺的なものから出立する意味がなければならない。デデキントの直覺は單に幾何學的であつたとしても、とにかく何等かの意味に於て直覺的なものがなければならない、數學的直覺論の如きものの起る所以である。直覺といふのは知るものと知られるものとの合一を意味し、場所が場所自身を限定するといふことでなければならぬ。併し斯く云ふ場合、合一するといふ意味に於て直に一つとなると考へられても、何處までも能限定面と所限定面とが區別せられなければならぬ。自己同一なるものを對象的に見れば單に一と考へられるが、それは所限定面即ち限定せられた一般者の自己限定として見られたのであつて、そこでは既に能限定面即ち自己自身を限定する一般者の自己限定の意味が消されて居なければならぬ。然るに、知るものと知られるものと一であるといふ直覺の意義は唯、能限定面の自己限定として考へ得るのである、かういふ意味に於ては極限に達するといふことはないのである。元來自己が自己を志向し、その極限として自覺を考へるといふことは、自己を對象化した

見方であつて、かかる見方によつて自覺といふものが見られるのでなく却つてかかる限定の逆限定によつて自覺といふものが見られるのである。自覺的限定と考へられるものは極限的限定とは反對の意義を有つてゐなければならぬ、却つてその否定の意義を有つてゐなければならぬ。故に自覺的限定に於ては自己が無となればなる程、自覺すると考へられるのである。唯、知的自覺と考へられるものに於ては、右の如き志向的限定の極限として考へ得るかの様に思はれるであらう。併しそれは最も對象的限定の意義を有つた自覺たるの故に外ならない。それは對象的限定に即して直に之を裏附ける自覺的限定を意味するものである、自覺的限定の意義を極小にしたものである。併し如何に自覺的限定の意義を極小としたものと云つても自覺は自覺である、單に極限として考へられるのではない。それは極限点として集合に属するのではなく、その外にあるのである、一つの圓周に於てある點は圓に属すると考へることもでき、その外に属すると考へることもできるであらう、併しその二者は異なつたものでなければならない。單に對象的限定の方向に考へて行けば、自覺的なものを包むものは集合の集合として無意義と考へられるであらう。併し私の一般者を限定する一般者の自己限定として自覺的限定といふのは、上に云つた如くかゝる意味の限定ではない、場所が場所として場所自身を限定するのである、一般者を限定する一般者の限定を意味するのである。故に極限として自覺といふものが考へられるのでなく自覺的限定によつて極限といふものが考へられるのである。

それでは意識作用とは如何なるものであるか。意識作用といふのは自覺的限定によって考へられたものでなければならない。自覺的限定といふのは場所が場所自身を限定することである、見るものなくして見ることである、即ちそれは直覺するといふことである。場所が場所自身を限定すると考へられるかぎり、そこに直覺があり、直覺といふものがあるかぎりそこに自覺の意義がなければならぬ。直觀といふのは單に知るものと知られるものとが合一することであると考へられるが、眞の直觀といふことは對象的限定を否定し之を包む意味を有すると共に、かゝる否定をも否定して而も之を包むといふ意味を有ってみななければならぬ、即ち辯證法的發展を包み之を成立せしめる意味を有すると共に、之を内に消す意味を有ってゐなければならない。知るものと知られるものと合するといふのは如何なることを意味するか、如何なる意味に於てそれが一と考へられるのであるか。單に知るものがなくなると云ふならば、それは單に對象となると云ふの外はない、そこに何等の意味に於ても直觀といふべき相はない。然らば自己といふものが對象の反省的裏面として對象に附着するとでも考へるか、かかる自己は對象化せられた自己、見られた自己であつて、見る自己ではない、かゝる自己が直觀するのではない。元來、主客合一といふ語句そのものが對象的限定の見方であつて、作用としての直觀といふことは見るものなくして見るといふことでなければならない、形なくして形あるものを見ると云

6-095

ふことである。對象的限定の方向に無限に自己自身を限定する對象的なものが見られなくなると共に、反省的限定の方向に無限に自己自身を限定する自己といふものも見られなくなり、「有るもの」が有るがまゝに自己自身を見ると考へられる時、眞の直觀といふことができるのである。之を對象が對象自身を限定すると考へられるかも知らぬが、斯く考へるのは既に對象的限定の立場に立つて居るのである。又自己自身を限定する自己が見られなくなると云へば、見るといふこともなくなるではないかと云はれるかも知らぬが、反省的方向に自己が見られなくなると云ふことは、見られる自己がなくなるといふに外ならない、かゝる自己がなくなった時、眞に見るといふことができるのである。自覺的限定といふのが普通に單に判斷的一般者に即して之を裏附ける一般者の自己限定として、即ち反省的一般者の自己限定として考へられるが故に、自覺といふものが一種の極限の如く考へられるのであるが、かゝる考へ方よりしては尚、知的自覺といふものを考へることができるであらう、眞の自覺といふものを明にすることはできぬ。眞の自覺を明にするには右に云った如き意味の直觀の考によらねばならない。それで意識作用の根柢には、いつでも自己自身を見るものがなければならぬ、直觀がなければならぬ、意識の過程といふのは無にして有を限定すると云ふべきである。無にして有を限定するとは如何なることを意味するか。それは我々が辯證法的發展と考へるものでなければならぬ、限定せられた或一般者が自己自身を限定して行くと考へられる時、そこに何等の矛盾もない、否、否定す

ら起り様がない。之に對して否定といふものが考へられるには、既にその一般者の外に出るといふ意味がなければならない、有に對する無といふものが考へられねばならない。併し肯定に對して否定といふものが考へられる以上、そこに肯定と否定とを包んだものがなければならない、かゝる一般者に於て矛盾するものが考へられるのである。かゝる一般者は有に對する無の場所といふものではない、有に對する無と考へられるものは亦一種の有たるに過ぎない。それは絶対に無にして而も之に於て有無を限定するものでなければならない、かゝる一般者の自己限定として辯證法的發展が考へられるのである。故に否定の否定として即ち矛盾の統一として肯定的なるものが考へられる時、そこにいつでも私が右に云った如き意味の直観がなければならない、即ち自覺の意義がなければならない。矛盾の統一と考へられるものは自覺的意義を有ったものでなければならない。我々の自己と考へるものは自己自身に於て矛盾するものである、存在そのものが矛盾を意味するものである。シェリングの直観といふのは主客合一といふ如き單に對象的限定の意味に於ての直観である、かゝる直観の内容としては唯、絶対的同一といふ如きものを考へるの外ない。かゝる直観から辯證法的發展は出て來ない、夜に於てはすべての牛が黒くなると潮けられても致方はない。自覺といふものを對象的方河に見る人は知的自覺といふ如きものを見るに過ぎない、而してかゝる考へ方によつては知的直観といふ如きものを考へるの外はない。併しかゝる方向に於て自賛といふものが見られるのではなく、眞の直観といふの

は無にして見るといふことでなければならない、無にして有を限定するといふことでなければならない。知的直観といふのも、唯かゝる意味に於て直観と考へられるのである。而してかゝる直観としては、右に云った如く辯證法的發展を含まなければならない。對象的限定から辯證法的發展は出て來ない、對象的限定に接し而も之を包む逆限定と考へられる反省的一般者の自己限定からも辯證法的存在を見ることはできない。普通にはかゝる一般者の自己限定として意識作用といふものを考へて居るのであるが、かゝる立場から知的作用といふものが考へられるとしても、情意的作用といふものすら考へることはできない。對象的限定に沿うて考へられるものは知的自覺といふものに過ぎない、反省的一般者の限定と考へられるものは知的自覺の自己限定を出ることはできないであらう。かゝる一般者の自己限定として辯證法的なるものを考へることはできない。無にして有を限定する眞の自覺的限定即ち私の所謂直観的自己の自己限定として自己自身に矛盾する意志的自覺といふ如きものが考へられるのである。知的自覺の自己限定として考へられる反省的一般者の自己限定といふ如きものは、對象的限定の極限として考へられるのではなく、實はかゝる自己限定のノエマ的極限として見られるのである。それ故に知的自覺の内容といへども、それが無にして自己自身を限定する自覺的限定の内容と考へられるかぎり、辯證法的發展の意義を有たなければならない。ヘーゲルの辯證法といふのはかゝる意味に於ての辯證法であつたと思ふ、そこにヘーゲルの辯證法の缺點があるのである。併しヘーゲル

の辯證法といへども單に對象的なものから辯證法的なるものが考へられるのではなく、有るものが一一に自覺的なものが故でなければならない、無にして有を限定する自覺的限定の内容たるが故でなければならない。我々に直接に與へられたものと云ふのは直觀の内容として辯證法的發展を含んだものでなければならない、最も具體的なものは辯證法的存在でなければならない、對象的なものはそれから限定せられるのである。

意識作用の根柢には無にして見るものがなければならぬ、形なくして形あるものを見るものの自己限定として意識作用といふものが考へられるのである。無にして自己自身を見る過程と考へられるものは辯證法的進行といふ如きものでなければならぬ。辯證法的進行といふのは無にして自己自身を見る無限の過程である故に、辯證法的進行の一々の點に於て無にして見るものに接してゐなければならない。無にして見るものが自己自身を見ることによって矛盾が止揚せられるのである、止揚の一々の點にて私の所謂直觀の意義がなければならない。ヘーゲルが最初の有が絶対であるといふ如く、絶対の上に辯證法が動いて居るのである、否、歩々絶対なるが故に辯證法的發展が成立するのである。辯證法的發展といふことは内もなく外もなく有るものが有るがまゝに自己を限定することである。故にヘーゲルの云った如くロゴスの自覺的發展と云つてよい、表現的自己の眞の自覺的發展と云つてよい。無にして見る自己のノエマ的限定といふものが表現的自己の自己限定と云ふことができ、かゝる自己

の自覺的限定の極致は無にして見る自己の自己限定として辯證法的たらざるを得ない。併し斯く無にして自己自身を見るものの自己限定が辯證法的と云つても、單に辯證法的自己限定といふものから直に自覺といふことは出て來ない。辯證法といふのは無の自覺のノエマ的限定を表すものであるが、そのノエシス的限定を表すものではない。自覺の意義は辯證法的運動を包む所に現れるのである。止揚の一々の點に於て自己自身を見るものに接し、そこに場所が場所自身を限定するといふ意味があるのである。眞の自己は無にして自己自身を限定するものとして辯證法的に自己自身を限定すると共に、單なる辯證法的過程として盡されるものではなく、之を包み之を限定するのでなければならない。上に自己を自己自身に矛盾するものと云つたのは尚ノエマ的見方であつて、單に自己自身に矛盾するものでなく、自己自身の矛盾を知るものでなければならない。知的自覺は尚辯證法的發展に即して考へることができるかも知らぬが、斯くして自由意志的自己を考へることはできぬ。意志的自己はその存在そのものが矛盾であると共に、之を越える意味がなければならない。そこに最も深い意味に於ての非合理性の原理があるのである、眞の非合理性は自己にあって外にあるのではない。無にして見る自己が自己自身の内に見る時、無にして有を限定するものとしてそこに無限の辯證法的進行といふものが考へられねばならない。無にして有を限定するものとして辯證法的進行に極限點といふものはない、極限點といふものがあつたらば、それは既に限定せられた一般者の自己限定として無にして自己自身を限

定するものと云ふことはできぬ。限定せられた場所の自己限定として、それは廣義に於ける判斷的一般者の自己限定と考へられるものであり、對象的認識の形式をなすのである。併し無にして有を限定する辯證法的過程といふものが直に自覺作用と考へることはできぬ。そこには既に場所が場所自身を限定するといふ自覺の意味が含まれて居るであらう。併しそれは尚ノエマ的自覺であつて眞のノエシスの自覺ではない、對象に即して見られる自覺の意義を脱せない、眞の自覺に於ては辯證法的進行そのものも止揚せられると考へなければならない。無限なる過程を内に包み過程そのものをも消すと考へられる所に、無が無自身を限定する即ち場所が場所自身を限定するといふ眞の意味があり、そこに眞の自覺があるのである。無にして有を限定すると云ふことすら、既にノエマ的限定の意味を脱せない。此故に自己自身が見られなくなる所に、眞の自己を見ると云ひ得るのである。無論かゝる意味に於て場所が限定せられるといふことは、同時に限定せられた場所自身の自己限定として對象的限定といふものを伴ふであらう、意識が志向的と考へられる所以である。併し最初に云つた如く對象的限定から自覺的限定を考へることはできない、却つて場所が場所自身を限定する自覺的限定によって對象的限定が成立すると云ひ得るのである。普通には意識作用といふのが對象的限定の逆限定の如くに考へられて居るでもあらう、反省によって意識作用が見られると考へられる、而して自覺といふ如きものも、かゝる反省の極限として考へられると考へられるのである。併し對象的限定からその否定は出

て來ないのみならず、かゝる逆限定として自覺といふものが見られるのでもない。却つて自覺といふものが見られることによって、かゝる逆限定が考へられるのである。無が無自身を限定する即ち場所が場所自身を限定するといふ自覺の立場から、かゝる逆限定が考へられるのである、即ち對象を内に包み之を自己に於て限定するといふ意識作用といふものが考へられるのである。故に意識作用といふのは無の場所の自己限定として無にして有を限定すると云ふことができる。之を辯證法的と云ひ得るであらう。併し之を單なる辯證法的過程と考へるならば、それは未だ眞の意識作用と考へられるものではない。何となれば、否定の否定として單に肯定といふもののみが考へられて行く時、それは尚對象化的過程たるを免れない。意識作用といふものが考へられるには、いつもそれに場所的限定が伴はなければならない。

自覺といふのは古來色々に考へられたであらうが、私は眞の自覺といふのは無にして自己自身を見る、無が無自身を限定するといふことでなければならぬと思ふ。自己とは無にして有なるものである、それは單に過程として見られるのではない。自覺的過程といふのは無にして見るものの自己限定として見られるのである。それでは自己といふものは全く見られないものであると云はれるかも知れぬが、見られないと考へられるものが見られるといふ所に、眞の自覺があるのである、それが自己が直に自

己を見るといふことであるのである。見られるものと見るものとが一であるといふことの眞の意義はそこになければならぬ。單にそれを見られないと云ってしまふのは自己を對象的に考へる故である。かゝる無にして自己自身を見るものの自己限定の過程として、そのノエマ的限定の方向に無限の過程といふものが考へられると共に、そのノエシス的限定の方向に無限の過程といふものが考へられなければならない。無にして自己自身を限定するものの無限なる自己限定の過程としては辯證法的なるものが考へられなければならぬ、而もそのノエシス的限定と考へられるものが、無にして自己自身を限定する場所自身の自己限定を意味するものとして、辯證法的と考へられねばならぬ。ノエシス的限定と考へられるものが、その一々の過程に於て辯證法的と考へられ、而もそれは場所自身の自己限定として、即ち否定の否定として肯定と考へられる點に於て、私の上に云った意味に於ての直觀の意味を有し、そこに自覺的なものが見られるのである。而して斯く自覺的なものは場所自身の自己限定の意義を有するが故に、自己自身を辯證法的に限定すると共に、之を包み之を止揚する意味に於て自愛と考へられ、更に之を超越するといふ意味に於て自由意志とも考へられるのである。之に反しそのノエマ的限定と考へられる方向に於ては、無にして見るもののノエマ的限定として、無限なる限定せられた場所の自己限定といふものが考へられる、そこに無限なる對象的限定といふものが考へられねばならぬ。而してそれは又限定せられた場所の自己限定として辯證法的限定を越えたものといふ意味

を有つてゐなければならぬ。無論、それは何處までも無の自覺のノエマ的限定としてそのノエシス的限定の意義を有するを以て、その背後に辯證法的なるものが考へられるであらう。ヘーゲルの辯證法といふのは主として此の如きものであったと思ふ。併しそれが限定せられた場所即ち有の場所の自己限定たる意味に於ては、之に於て所謂對象的知識といふものが限定せられるのである。私の廣義に於ける判斷的一般者の自己限定と考へるものがそれである。かゝる一般者の自己限定として合目的的世界といふ如きものまで考へることができるであらう、併し意識的過程といふものを考へることはできぬ。意識作用と考へられるものは無にして自己自身を限定する即ち場所自身の自己限定として考へられなければならない。場所そのものの自己限定を映すものとして即ち直觀的限定として自己といふものが考へられ、かゝる自己の自己限定として意識作用といふものが考へられるのである。かゝる自己の自己限定が右に云った如き限定せられた場所に即して考へられた時、知的自覺を中心とした知的作用といふものが考へられる。故に知識成立の根柢にはいつも直覺があると考へられる、普通に直覺と考へられるものはかゝるものを意味するのである。併し我々の自覺は單に限定せられた場所に即して考へられるのではなく、却つて前者は後者を包むといふ意義を有するを以て、場所自身の自己限定といふものが獨立に見られねばならぬ、それが我々の自愛と考へられるものである。かゝる場所的限定の内容と考へられるものが我々の情的意識内容と考へられるものであり、それは勝義に於て我々の自

己の内容を意味するものである。そこには作用といふ意味はない、情的自覚は勝義に於て自己の存在を意味するものである。併しそれは單に自己自身を限定する場所として存在といふ如きものでなく、場所自身の自己限定として内に辯證法的なるものを包まなければならない(愛は事を包むものでなければならない、自愛といふのも自己の種々なる欲望の辯證法的闘争を包むものである)。併し無にして見る自己の自己限定として場所が場所自身を限定するといふ意味は、單に辯證法的過程を裏付け之を包むといふ意味のみでなく、自己に於て自己を辯證法的に限定し自己自身を辯證法的に見るといふ意味を有するを以て、我々の自覚は單に辯證法的過程を止揚し之を包むといふ如き自愛的自覚を越えて更に深い自覚に至らなければならない、意志的自覚と考へられるものがそれである。場所自身の直接限定として見られるノエシ的自覚の場所の内に包み切れない辯證法的過程を何處までも包むといふ意味に於て意志的自覚といふものが成立するのである。故に意志的自己はいつも矛盾の尖端に於て見られるのである、自己自身を破る所に意志的自覚があるのである、プンクトゥム・サリーンズである。それは情的自己の如く直覺的ではなく過程的である、意志的自己は矛盾的存在と考へられる所以である。意志的自覚も自愛と云ひ得るであらう、否、最も深い自愛と云はねばならない。併し意志的自覚は見られない自己を求めて行くのである、自己のない所に自己を見出さうとするのである、故に行為に於て自己自身を失ふ所にその終極點を有するのである。對象的限定の立場から云へば、辯證法的過

程の背後に場所自身の直覺的限定として自覺的なるものを見るといふことはできないと考へられるであらう。併し辯證法的運動といふものが固單なる對象的限定として考へられるのではなく、無にして自己自身を見るもののノエマ的限定として見られるものでなければならない。アン・ジヒからフュール・ジヒに至り更にアン・ウント・フュール・ジヒに還ると云っても、對象としてのアン・ジヒが死することによってフュール・ジヒが對象的に生れるのである、而して又前者が對象的にアン・ウント・フュール・ジヒとして蘇生するのである。アリストテレスが主観と客観とを包む一般概念はないと云った如く、そこには對象的連續といふものはない。フュール・ジヒがアン・ジヒに潜在的に包まれるなどと考へるならば、それは無を有とする形而上學的見方であって辯證法ではない。マールブルク學派の生産點の如く極微的に含まれると考へるならば、それは單に限定せられた一般者の自己限定といふ如きものであって、それから辯證法的運動は出て來ない。辯證法的運動といふものが考へられるには、そこに對象的限定としては斷絶がなければならぬ、如何なる意味に於ても對象的連續が考へられるならば、それから辯證法的運動は出て來ない、辯證法的運動は唯斷絶の連續によって成立するのである。故に自覺的なるもののみが辯證法的であるのである。アン・ジヒからフュール・ジヒに轉ずるといふことは自己が自己を對象化することでなければならぬ、アン・ウント・フュール・ジヒに還るといふことは自己が自己に於て自己を見ることでなければならぬ。そこに場所の自己限定として

見られた自己の意味があるのである。併しそれが(ノエシスの自覚として)見られた自己の意義を有するかぎり、それは亦辯證法的に死に行くものでなければならぬ、斯くして無限の辯證法的進行が成立するのである。故に私の場所といふのは辯證法的過程の裏附の如きものを意味するのではなく、場所の自己限定の過程として辯證法的運動が成立するのである。それは單に辯證法的過程を裏付け之を包むといふ如く過程に即して考へられたものでなく、過程的限定を越えて無が無自身を見るといふ意義を有するを以て、辯證法的限定の尖端に於て無にして有を限定する場所自身の自己限定として、自覺的なものが見られなければならぬ。過程的と考へられるかぎり、それは辯證法的といつても尚全然對象的限定の意義を脱することはできない。斯くして右に云った如く辯證法的限定の尖端に即して之を裏附ける如く見られるものが知的自覺と考へられるものであり、場所自身の積極的自己限定として直覺的に見られるものが情的自覺と考へられるものである、そこに作用そのものも消される意味があるのである。斯く場所が場所自身を限定して行くといふことは自愛と考へられるものである。自愛といふことは亦一種の過程と考へられるかも知れぬが、アウグスチヌスが我々は知らない自己を愛することができぬと云ふ如く(無論その知るといふのは對象的認識の意味ではないが)、愛の根柢には直觀がなければならない。而してそれは無にして自己自身を限定する場所自身の自己限定の意味でなければならない。故に愛は辯證法的運動を包むものでなければならない、自己自身を愛することが深け

れば深い程辯證法的となるのである、その極遂に意志的自覺といふ如きものに移って行かなければならない。我々が普通に自己と考へるものは自己自身を限定する事實そのものに即して考へられた知的自覺といふ如きものである、所謂身體的自己である、無にして見る自己のノエマ的限定に即して見られた自己といふべきであらう。かゝる意味の自己は場所自身の自己限定の意味が深くなるに従って、即ち自愛が深くなるに従って見られなくなる、自己自身を見ること深ければ深い程自己がなくなると云ふことができる。併し右の如き意味に於て見られた個人的自己がなくなると云ふことは直に自己がなくなると云ふことではない、場所自身の自己限定としての情的自覺の意味は之と共になくなるのではない。直觀的自己の意味に於て我々の自己は深められ廣げられて行くのである、社會的自己といふ如きものは斯くして考へられるのである。社會的自己といふ如きものは知的自覺として見られるものではなく、そこには所謂感情移入といふ如きものがなければならない。斯くして場所自身の自己限定としての情的自覺の意味は即ち直觀的自己の意味は何處までも深められ廣げられて行くと考へることができるが、場所が場所自身を限定する意味に於て單に辯證法的運動を包むと考へられる情的自覺といふのは、尚見られた自己、見られた場所といふ如きものであって、眞に無にして見る自己そのものではない、眞に自己自身を限定する場所そのものではない、神の肖像であって神そのものではない。それは何處までも辯證法的運動を包むと云ひ得るであらう、併し自己自身を辯證法的に限定するもの

ではない、自愛的過程の段階とも云ふべきであらう。斯くして自己自身に於て無限の辯證法的矛盾に陥らざるを得ない意志的自覺といふものが、眞に場所そのものの自己限定として自己自身を見る自愛の過程と考へられねばならぬ。而してそれは存在そのものが自己矛盾を意味するものとして眞に辯證法的といふべきものでなければならぬ。我々の自己が自己自身に矛盾する所に我々の眞の自己があるのである。嚮に場所自身の自己限定として社會といふ如きものに於ても自覺の意味がないのではないと云ったが、眞の自己は見られた自己にあるのではなく、無にして見る自己のノエシ的限定としてそのノエマ的限定を包むと考へられる所になければならない。無にして見る自己のノエマ的限定と考へられるものが自己自身を限定する事實そのものと考へられるならば、眞の自己は事實そのものに即して之を包む意味を有ったものでなければならぬ、我々の自由意志と考へられるものがそれである。無にして見る自己の自己限定をノエマ的とノエシ的との兩方向に無限と考へるならば、そのノエマ的限定の極限に於てノエシ的限定がノエマ的限定を包むと考へられる所に、我々の眞の自己といふものが考へられねばならぬ。我々が普通に事實的限定に即して考へられた知的自覺を内部知覺的自己として實在的な眞の自己と考へるのも之に外ならない。その實、事實に即して見られる知的自己として自己が自己であるのではなく、無にして見る自己のノエシ的限定として事實そのものをも包む意味に於て(自由意志的自己の意味に於て)自己が自己であるのである。 内部知覺的自己と考へられ

るものは、かゝる自己のノエマ的自覺として見られるのである。事實が事實自身を限定するノエマ的限定のノエシ的限定として眞の自覺といふものが見られ、かゝる自覺が場所自身の自己限定として、見られた場所、見られた自己の意味を有するかぎり、かゝる自覺を中心として意識作用といふものが考へられるのである。之に反し、右の如き意味に於てもはや自己が見られなくなる時、行為といふものが考へられるのである。行為に於て自己が見られなくなるといふ意味に於て、更に見るものなくして見るといふ方向に進めば、そこに歴史的行為といふものが見られる。之に反し無にして見る自己のノエマ的限定の方向に於て、限定せられた場所の自己限定として自然界といふものが考へられるのであらう。併し行為に於て自己が見られなくなるといふ意味はそれが眞に無にして見る自己となるといふ意味ではなくして、自覺が場所自身の直接の自己限定として見られるといふ意味を失うて、唯ノエマを包むといふ意味を有すると云ふことに過ぎない、場所が自己自身を見るといふ意味を失って、唯自己に於て自己を限定するといふ過程的限定となるといふことを意味するに過ぎない。無にして見る自己の自己限定といふのを單にかゝる行為的限定と見るならば、それから我々の自由意志的自己といふ如きものは否定せられなければならない。

我々が自己自身を知るといふことは、單に言表に即して了解せられるのでもなく、又志向の極限と

して意識せられるものでもない、私は唯超越的述語面の自己限定即ち場所自身の自己限定として知られるのであると思ふ。而して判斷的知識と考へられるものがすべて一般者の自己限定と考へ得るとするならば、かゝる限定は勝義に於て知るといふことでなければならぬ、所謂客觀的知識と考へられるものも之によって基礎付けられて居るといふことができる。而してかゝる自覺的有の自己限定として意識作用といふものが考へられるのである、志向といひ表現といふもかゝる自覺的有の自己限定の作用として考へられるのである。無論、自己自身を限定する場所の自己限定は限定せられた場所の限定を含むを以て、自覺的限定には必ず對象的限定が伴ふであらう。自覺的限定の意義の小なるものに於ては、或は單に對象的限定を裏附けるものとも見られるであらう。又見られた自己の自覺的限定といふのは、無にして見る自己のノエマ的限定に對するノエシス的限定の意義を有するを以て、對象的限定によって自覺的なるものが見られるとすら考へられるかも知れない。併し何處までも對象的限定から自覺的限定は出て來ない、啻に對象的限定から見られないのみならず、單に對象的關係に於てのみ見られるのもない。私は我々の自己は自ら獨立の實在性を有って居ると思ふ、自己はそれ自身の實在性を有し作用的に自己自身を限定するのである。かゝる意味に於て限定せられたものとして精神科學的對象といふものが考へられるのである。自己といふものは單に歴史に依存するものでもない、無論、行為的として自己限定の過程に於て歴史に制約せられねばならぬのは云ふまでもないが、場所自

身の自己限定として一方に於て自己自身を見るといふ意義を有するのである（それによってイデヤ的なるものも見られるのである）。自覺的なるものは自己自身の内から理解せられなければならぬ。而して場所自身の自己限定として自覺的なるものが最も深い意味に於て「有るもの」の意味を有し、客觀的有と考へられるものはそのノエシス的限定の意義を極小としたものと考へることができる。私は私の所謂場所の自己限定といふことが最も廣い意味に於て知るといふことであつて、所謂客觀的知識といふのは限定せられた場所の自己限定として考へることができると思ふ。自覺的なるものの自己限定の内容として事實的なるものが考へられる。そのノエシス的限定の意義を極小にしたものとして外的事實といふものが考へられるが、見られた場所自身の自己限定としてはそれは内的事實と考へることができる。精神的有と考へられるものはすべてかゝる内的事實の意味に於て考へられるものであるが、更に深く考へれば事實と考へられるものは固、内的事實でなければならない。我々の個人的自己の尖端に於て自己が自己を失つたと考へられる所に、眞の事實といふものが見られるのである、即ち無にして見るものの自己限定の内容として事實的なるものが見られるのである。直觀の内容と考へられるものはすべて事實的なるものでなければならない。而してすべての知識は（數學の如きものですら）事實的なるものの自己限定に基くのである。事實的なるものが自覺的なるものの内容として、無にして自己自身を限定する一般者の自己限定の内容たる意義を有するが故に、それによって概念的知

識が成立するのである。我々が直観の内容を事實的と見るといふことは、それが既に概念的であるといふことを意味するのである。無論、特殊科學は何等かの意味に於て直観的なものが限定せられることによって、即ち私の所謂場所が限定せられることによって成立するのであるが、哲學は限定するものなきものの自己限定によって成立するのである、立場なき立場によって成立するのである。而もそれは單に何等の立場もないと云ふことではない、それが眞の自覺の立場といふべきものである。哲學は無にして自己自身を限定する自覺そのものの事實に基いて成立するのである。それは同時に宗教的事實とも考へられるであらう、併しそれは直覺的事實として一面に知識の意義を有するのである。無論、自覺といふのが單に對象的限定に即して考へられるものであるとか、單に了解せられるものであるとか云ってしまへばそれまでであるが、私は自己は自己を知るものであると考へるのである。知るものが知られるといふのは矛盾と考へられるであらう、併し矛盾と考へられる所に、眞の自覺の意義があるのである。私は哲學は一種の否、眞の人間學の意味を有って居ると云ってよいと思ふ。併しそれは自覺的人間の人間學でなければならない、外的人間 *homo exterior* の學ではなくして内的人間 *homo interior* の學でなければならない。内的人間と考へられるものがアウグスチヌスの云ふ如く神の直接の肖像である。

例へばパスカルの人間論といふ如きものは眞に我々の深い自覺の事實に基いたものである、自己自身を直視したものである、デカルトの *cogito* の意味を眞の自覺の立場に深めたと云ひ得るであらう。無論、それは對象認識といふ意味に於ての知識ではない、*connaissance par le coeur* である、*sentiment* の事實である。併しそれは所謂感覺や感情の事實といふものでもなく、又藝術的内容の了解といふ如きものでもない。それは「有るもの」の知識である、苟も自己自身を自覺するものの認めなければならない知識である。そこに一種の範疇がなければならぬ、私が考へる、私が欲する、私が愛するなどいふことは自覺的なものの存在形態である。「有るもの」と云へば所謂客觀的有に限られる如くに考へられるが、眞のヒポケメノン（Hypokeimenon）は自己自身を知るものでなければならぬ。私は却って所謂認識の形式と考へられるものをかゝる知識の形式に於て見ようと思ふのである。無論、かゝる知識は客觀的認識のそれの如く法則的ではないが、又單に解釋學的了解とも區別すべきものである。意識一般は直覺的なものを外に見て居るのでなく、内に見て居るのである（一面に *sentiment interieur* の意味を有って居るのである）、此故に自覺の意義を有するのである。唯それが *intuitiver Verstand* と區別せられるのは、無にして見るもののノエマ的自覺といふべきものであるから、その内容が客觀性を有つのである。意識一般に佛人の、所謂サンチマンの意味を附することは肯がはれないかも知れないが、我々の自覺の事實といふものが對象的限定から導き來ることができればとにかく、然らざれば我々の

自己は無にして自己自身を限定するものとして、そのノエマ的限定の極限に於て事實が事實自身を限定する意味を有たねばならぬ。デカルトは自覺によって眞實在を考へ、又それによって直覺的知識といふものを明にした。デカルトの自覺は知的自覺であつたと云ひ得る、所謂デカルト哲學はこの方向を進んだ。併しデカルトの自覺からメーン・ドゥ・ピランの *j'agis, je veux, ou je pense en moi l'action* といふ方向に進むこともできるであらう。かゝる自覺の方向に、踏み出したのがパスカルであつた、フランスの哲學にはかゝるサンチマンの哲學の流がある。デカルトの「私が考へる」を超越的述語面の自己限定として、「私がある」といふ有の意味を場所的有と解するならば、場所自身の自己限定として自愛といふものが考へられ、それからサンチマンの哲學が基礎附けられるであらう。サンチマンといつても單に眼にて見るといふ如きことを意味するのではない、それは見ると共に知るのである。デカルトは之に反し自覺をノエマ的に考へ而も之を實體として對象化した、是に於て彼は形而上學に陥つた。知的自覺であっても、何處までもノエシス的限定の意義に考へ、而も無にして自己自身を限定すると云ふに至れば、カントの意識一般といふ如きものが考へられるであらう、即ち純然たる對象認識の主觀となる。併しそれが何處までも超越的對象といふ如きものと異つて自己の意義を有するかぎり、メーン・ドゥ・ピランの *j'agis, je veux* の意味がなければならない。カントの意識一般はフィヒテに於て超越的意志として又形而上學に陥つた、ノエシス的限定としてサンチマンの方向に見

るべきものをノエマ的方向に對象化したのである。ヘーゲルの辯證法に至つて、意識一般の自己限定といふべき對象的限定そのものが、ノエシス的限定として直に *sentiment interieur* の意義を有つに至つたと云ひ得るであらう。對象的限定そのものの背後に直にパスカルがサンチマンによって自己自身の底に見た自己矛盾が見られたのである。辯證法的運動といふものは固、單なる對象的限定から出て來るのではない。意識一般の自己限定として對象的限定と考へられるものが眞の自己限定の意味を有つ時、自ら辯證法的とならざるを得ないのである、即ち眞に具體的對象の自己限定は辯證法的たらざるを得ないのである。對象的限定の意義に於ける單なる有が直に無なるのではない、有そのものの自覺が無なるのである。メーン・ドゥ・ピランがその人間學に於て論じて居る様なフランスに於けるサンチマンの哲學は自覺的事實の獨立性を把握しながらも、その認識論的意義が明でない、それは單に心理學的と云はれても致し方がない。之に反しライプニッツやロッチェの如きは自覺を對象的限定として考へることによってそれを形而上化してしまつた。對象的限定の立場から見れば自覺の事實は形而上化せられるか、然らざれば單にポストゥラートと見られるの外はない。併し我々の自覺に於ては、それは事實であつてポストゥラートではない。自覺的限定の論理的形式として私の所謂一般者の自己限定といふのは廣義に於ける知識 *connaissance* の形式でなければならぬ。恰も圓錐形の種々なる切斷によって種々なる二次曲線が成立する如く、それによって種々なる知識が成立するのである。

哲學史上自覺の深き意義に徹底し萬物をその立場から見た人はアウグスチヌスであったと云ひ得るであらう。その「三位一體論」の一篇は一種の神學的人間學と云ふことができる。我々が外物を離れて深い内省的事實の中に自己自身の實在性を求める時、自ら神に至らざるを得ない。彼は「懺悔録」の始に *Thou awakest us to delight in Thy praise; for Thou madest us for Thyself, and our heart is restless, until it repose in Thee* と云って居る。彼は我々の自覺的實在の根抵を神に求めた。メーン・ドゥ・ビランの「人間學」といふ如きものも我々の精神的生命の基を神に歸して居る。斯く我々の精神的實在の根抵は唯宗教的信仰によつてのみ説明し得るものならば、そこに何等の哲學的意義は認められない(宗教的意識内容といふ如きノエシス的な内容をノエマ化すれば形而上學に陥るの外はない)。併し我々の自己の根抵はノエマ的神にあるのではなくノエシス的神にあるのである。ノエシス的神といふのは(神なき所に眞の神を見るといふ如く)神そのものもなくなって、私の所謂絶對無の自覺といふ如きものでなければならぬ。そこにすべてのものの根抵があるのである、それは我々の自覺的自己の根抵たるのみならず、神そのものの根抵となるのである。上に云つた如く眞に具體的對象の自己限定として考へられるヘーゲルの辯證法はパスカルが自己自身の底に見た自己矛盾の事實でなければならぬ。哲學は我々の自己の自己矛盾の事實より始まるのである。哲學の動機は「驚き」ではなくして深い人生の悲哀でなければならぬ。